

2025/03/07

Clinicopathological and genetic analyses of thyroid large B-cell lymphoma in a Japanese population Ayumi Numata,1) Rika Sakai,1) Kae Kawachi,2,3) Yasufumi Ishiyama,1) Yukako Hattori,1) Hirotaka Takasaki,1) Tomoyuki Yokose,2) Naoya Nakamura,4) Hideaki Nakajima5)

Journal of clinical and experimental hematopathology Vol. 64 No. 4, 286-291, 2024

原発性甲状腺リンパ腫のうち大細胞型 B 細胞リンパ腫 (LBCL) は、予後良好であるがその理由は未だ不明である。甲状腺 LBCL の良好な臨床転帰に影響を及ぼす因子を同定するために甲状腺 LBCL 21 例の臨床病理学および免疫組織化学、FISH、MYD88 変異の解析を含む遺伝学的解析を行った。

患者の年齢中央値は 70 歳 (範囲、54-80 歳) であった。5 年全生存率は 83% (95% 信頼区間: 56%-94%)。中枢神経系 (CNS) の再発は認められなかった。21 例中 15 例は DLBCL, NOS、残りの 6 例は indolent B-cell lymphoma からの transformation であった。

FISH による解析では、MYC のスプリットシグナルが 2/17 例、BCL6 のスプリットシグナルが 3/15 例に認められた。MALT1 のスプリットシグナルは前例で認められず MYD88 変異は検出されなかった。甲状腺 LBCL における良好な臨床経過の要因は、GCB 表現型の割合が高いこと、DLBCLnos および T-IBCL に MYD88 変異がないことであった。なお MYC-R 症例でさえも予後は良好であった。

甲状腺を含め節外臓器における LBCL の大規模シリーズを含むさらなる研究が、本研究の所見を検証するために必要である。